

なぜ彼は旅立ったのか？

情報工学科1年 瀬戸 友太

なぜ、彼は己を恥じなければいけなかったのか、非があるのは差別する側の人間、それを許す社会ではないのか。私は素直にそう感じた。「部落差別」を題材にした島崎藤村の「破戒」である。

「部落差別」というと、小学校や中学校のころ時間割にあった「道徳」の授業を思い出す。「渋染一揆」や「水平社」もこの授業で学んだ。ただ、正直言って私はこの時間が苦手だった。なぜかは分からない。ただ、心のどこかで自分には無関係なことだと考えていたのかもしれない。

被差別部落に生まれ育った主人公・瀬川丑松は、父に生き立ちを隠して生きよ、と戒めを受ける。しかし、学校で丑松が被差別部落出身であるとの噂が流れ、さらに慕っていた猪子が壮絶な死を遂げたこともあり、ついに、生徒に土下座して、謝るということで、戒めを破ってしまう。その結果、偽善に満ちた社会は丑松を追放する。

結末として、丑松は猪子のような解放運動家にはならず、アメリカ・テキサスへと旅立つことになる。しかし、この結末には「え、何故？」と思わずにはいられなかった。

個人的には、丑松は猪子の後を継ぎ、社会の不条理に立ち向かう解放運動家になると思っていた。それなのに、なぜ丑松は戦うことを避け、逃げるようにアメリカへ行ってしまったのか。不思議だった。

しかし、丑松という人物を考えると理解できた。それは作中の丑松の性格や行動の描写からも明らかに猪子とは異質であることが分かる。目立たない優しさや生徒から慕われる人間性などは見るべき面がある。

しかし、彼にはナポレオンのような英雄的な人物ではなく、猪子のように社会の不条理に立ち向かっていくようなエネルギーに満ちあふれた人物でもない。丑松は我々と同じように考え、恐れ、葛藤する。

このように考えると、丑松は「日本の差別社会」から逃げ出したのではない。

逆にこのような社会に絶望することなく、また、自ら命を絶つこともなく、新たな地で、新たな生活を求めて旅立つという決断こそが彼にとっての戦いであったととらえることができるのではないだろうか。

また、自分を苦しめてきた社会に立ち向かうより、新たな生活を求めて旅立つ方が人間の肯定的な人生観、より自然な選択では無いかと考えた。そして、丑松はテキサスへと行き、物語は一応の終局を迎える。

80年以上がたった現在、出身地区による差別はなくなりつつあるのかもしれない。しかし、差別そのものは「いじめ」や「虐待」などに名前と形を変え、現実問題として尾を引いている。同じ人間である以上、互いに差別してはならない。これは誰もが認識し

ていることである。それにも関わらず、まだ根強く残っていることは恥ずべきことではないだろうか。私たちに与えられた課題はまだ、未解決のままである。